

天吹について

公益委員 白尾國豊

皆さんは、「天吹(てんぷく)」という鹿児島独特の縦笛をご存知でしょうか。

明治維新 150 周年という節目を迎えるに当たり、郷土の文化を見直そうという動きが高まっていますが、その一つとして「天吹」をご紹介したいと思います。

以下、天吹の保存・伝承に努めている天吹同好会関係者の話されたことを要約します。

「天吹」は 30 センチ前後の、小さな尺八の姿をした縦笛で、演奏者が自ら竹(コサン竹)を切り、自ら製作して吹いて楽しむという楽器です。なんとといっても他の県には無い鹿児島独特のものであるということが、最大の特徴でしょう。竹を選ぶときの指針として「イッピラニマガイ」一に(指穴になるところが)平たく、二に(管尻になるところが)曲がっている竹が良い、などと鹿児島弁で伝承されているのも面白いと思います。

さて、その歴史ですが、確かな記録として、イエズス会によって 1603 年長崎で発刊された日葡(にっぽ)辞書(キリスト教布教のために日本語をポルトガル語で解説したもの)に「Tenpucu.てんぷく」の項目があるそうですから、関ヶ原の戦い(1600 年)当時、九州に「てんぷく」と呼ばれる笛があったことは事実でしょう。

関ヶ原の戦いといえ、義弘公の配下、北原掃部助という者が関ヶ原で生捕に遭い首を刎ねられようとした際、暫く暇を乞い天吹を吹きならすと、聞く人に感動しない者は無く、赦され、其の天吹を助命器と銘うって家宝としたという話が伝わっています。藩政時代には、天吹は自顕流、薩摩琵琶とともに武士の嗜みとして位置づけられ、剣術の達人でかつ「天吹」の名手であったという記述が散見されます。明治になると郷中教育の流れを受け継いだ学舎教育の中で、「琵琶天吹をかじらない者はいないぐらいであった。」と言われるぐらい盛んだったそうです。忠義公(久光の長男島津家 29 代当主)手づから製作された天吹も残っていますから、殿さまから青少年にまで広く愛好されていたということが分かります。

ところが明治の末年、舎生の学業不振は「琵琶天吹」が理由だと禁止されたことを機に急激に衰退したそうです。禁止したからと言って成績が上がったものでもあるまいと、当時を残念がって回想した文章があります。

結局、大正、昭和にかけて製作方法、伝承曲七曲を正しく受け継いでいる人は大田良一氏という方(明治 21 年生)ただ一人という状況になってしまいます。大

田さんは若くして故郷を離れ、帰鹿されたのは昭和 28 年ですから、鹿児島では、天吹の正統的演奏を聴く機会は半世紀近くなかった訳です。大田さんの帰鹿を機に天吹を継承しようと、天吹柴笛振興会が結成され、それが「天吹同好会」に受け継がれて、同会は今年第 36 周年を迎えています。

天吹の細く高く澄み切った音色には鹿児島の歴史と精神が宿っているかのようです。大田さんは琵琶の名手でもあり、次のような言葉を残していますが、天吹の精神にも通じると思います。

「幽玄なる琵琶道の神髓をつかまんとするには撥(ばち)を鋤(すき)に替え、倦まず撓まず飾らず傲らず営々として深く掘り下げてこそ初めてそこに滾々と湧く清水に達する。」(「薩摩琵琶」越山正三著より)